

## 保育士を対象とした「虫」と「動物」についての意識調査

教育学科 平田 豊 誠 京都ノートルダム女子大学 小川 博 士

### 抄 録

「虫」や「動物」は、一般に日常用語として使用されることが多く、人によって意味する範囲が異なっている。また、現職保育士を対象にした「虫」や「動物」に対する意識調査はなされてきていない。そこで、本研究では、保育士を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、「虫」や「動物」ととらえている範囲を明らかにするとともに、保育士が実施している、虫や動物に関連した取り組みの実態調査を行った。

その結果、「虫」のイメージは、83.1%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物（11.2%）や節足動物以外（3.5%）、まれに脊椎動物の一部（2.2%）が含まれることが明らかとなった。また、動物のイメージは、哺乳類が91.6%であり、続く鳥類が5.5%、爬虫類は2.4%であり、「動物」という用語は科学用語よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。このことは、保育を担っている人材が動物＝哺乳類という認識を持っていることであり、偏った動物概念や認識を無意識に園児たちに植え付けている要因となっている可能性が示唆される。

また、保育士として就職後には、動物を飼育してみたり、虫取りを子どもたちと行ってみたいといった体験活動を行っており、学生時代に保持していた虫に関する嫌悪感や苦手意識が薄らいでいる可能性が示唆される。

Key Words：虫，動物，科学用語，保育士，幼児教育

### I はじめに

動物との関わりについては、幼稚園教育要領解説（文部科学省，2008）や保育所保育指針解説書（厚生労働省，2008），幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説（内閣府，文部科学省，厚生労働省，2014）にも取り上げられており、動物飼育という具体的内容が重要視されている。これらの中で、小動物という記載は以下のような実態がある。幼稚園教育要領解説で

は「小動物と一緒に遊んだり」という表現がなされており、その出現数は1件である。保育所保育指針解説書では「親しみの持てる小動物」のように記載され、出現数は5件である。幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説では、幼稚園教育要領解説と同様に「小動物と一緒に遊んだり」という表現がなされており、その出現数は3件である。

平田・小川（2017）では、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象に、「虫」及び「動物」と

してイメージするものについての調査を行うとともに、就職後に子どもたちに提供しようとする動物関連の活動意欲について調査を行っている。虫のイメージでは、86.3%が昆虫であり、動物のイメージでは哺乳類が89.9%であることが判明した。また、虫嫌いの学生が多くいる現状の中、幼児教育現場で働くにあたって、虫や動物の好き嫌いにかかわらず、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みを行っていく意識のあることが判明している。しかしながら、虫や動物、昆虫等の生き物に関する意識調査では、子どもを対象とした調査や教員志望学生を対象とした調査、保護者を対象とした調査・研究がなされているが、現職保育士を対象に行った調査報告はほとんど見受けられない。

また、「虫」や「動物」は、一般に日常用語として使用されることが多く、人によって意味する範囲が異なっている(平田・小川, 2017)。従来からの調査研究においてもこれらの用語が使用されているものの(例えば、落合, 1996, 1997, 1998; 日高, 2004, 2005; 田中, 2015; 木村・野崎, 2016)、科学的な定義による共通認識がなされておらず、調査者と被調査者間に認識のずれが生じている可能性がある(例えば、中村ら(2002)、山下・首藤(2005)、栗原・野尻(2008)では、動物飼育の経験を問うた場合に、動物という用語を用いた調査において、小動物や昆虫も回答されている)。

そこで、本研究では、次の2点を研究の目的とする。1点目は、現職保育士を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、保育士が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることである。2点目は、保育士が実施している、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みの実態を調査し、虫の好き嫌いや動物の好き嫌いでの比較検討および、幼稚園教諭・保育士志望学生の持つ就職後に子どもたちに提供しようとする

動物関連の活動の意欲との比較検討を行うことである。

## II 調査方法

### 1 対象及び時期

京都市内の私立大学で実施された特例講習「保育内容の研究」(「幼稚園教諭の普通免許状に係る所要資格の期限付き特例」(保育士実務経験者3年以上を対象))を受講した44名を対象に調査の協力を仰ぎ、2017年7月下旬日にアンケート調査を実施した。対象者44名全員(女性42名、男性2名)から回答を得た。

### 2 調査の方法と質問項目

平田・小川(2017)の調査項目をもとに、現職保育士向けに質問内容を改変して実施した。調査は質問紙法を用いて行った。今回の研究で用いた質問項目は以下の通りである。

属性質問：男女、保育職経験年数

- 1) 「虫」を20書いてください
- 2) 「動物」を20書いてください
- 3) 虫は好きですか、嫌いですか
  - 1 好き
  - 2 どちらかといえば好き
  - 3 どちらでもない
  - 4 どちらかといえば嫌い
  - 5 嫌い
- 4) 動物は好きですか、嫌いですか
  - 1 好き
  - 2 どちらかといえば好き
  - 3 どちらでもない
  - 4 どちらかといえば嫌い
  - 5 嫌い
- 5) あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか

- 6) あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか
- 7) 自身の担当の教室で動物を飼っていますか
- 1 毎年飼っている
  - 2 数年に一度程度飼っている
  - 3 飼ったことがない
- 理由があれば教えてください
- 8) 自身の授業や外遊びなどで子どもたちとともに虫取りなどを行うことについて
- 1 よく行っている
  - 2 たまに行っている
  - 3 ほとんど行っていない
  - 4 行っていない
- 理由があれば教えてください
- 9) 虫を今現在、触ることについての意識について
- 1 平気で触ることができる
  - 2 何とか触ることができる
  - 3 どちらでもない
  - 4 極力触りたくない
  - 5 絶対に触りたくない

質問1) および2) では、「20書いてください」と教示するのみであり、出題者は補足の説明をせず、記述する内容の判断を回答者に任せることとした。

質問3) および4) では、「虫」及び「動物」に対する好き、嫌いについて、「1好き」「2どちらかといえば好き」「3どちらでもない」「4どちらかといえば嫌い」「5嫌い」の5件法での回答を求めた。

質問5) および6) では、虫や動物の代表例といわれたときに思い浮かべる一番目のものに限定し、その名称を回答してもらった。

質問7), 8) では、回答者が現在の職場で、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組

みを行っているかどうかについて質問した。

質問9) では、虫を触ることの意識について、現在の状況を「1平気で触ることができる」「2何とか触ることができる」「3どちらでもない」「4極力触りたくない」「5絶対に触りたくない」の5件法で回答を求めた。

### III 結果

#### 1 「虫」について

虫についての調査結果について述べていく。「1」「虫」を20書いてください」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表1に示す。集計方法として、例えば、カマキリ42の場合、44名中42名が記述していたことを表している。同様に虫の名称ごとの人数は、その虫を記述していた人数を表している。集計に当たっては、類似した記述は一般的に代表されている1つの名称にまとめてカウントすることとした。まとめた例としては以下のようなものがあげられる。①ひらがな、カタカナ、漢字の表記は、すべてカタカナ表記で統一した。②クワガタとクワガタムシの場合、クワガタとしてまとめた。③セミ、ミンミンゼミ、アブラゼミのような場合（包含関係のある名称を述べていた場合、詳細名を含むそれらを代表する名称として）、セミとしてまとめた。④同じ人物が、ミンミンゼミ、アブラゼミと記述していた場合は、2カウントとせず、セミとしてまとめ1カウントとした。⑤チョウやトンボ、クモなどは「目」でまとめた。一般名称として認知度が高いセミなどは「科」でまとめることとした。⑥生物の名称として明らかに誤りのあるものは、正しい名称として集計を行った。

今回の集計にあたり、記載された虫を一般的分類と考えられる以下の5つのカテゴリに分類整理した。1. 昆虫, 2. 幼虫等, 3. 節足動物（昆虫除く）, 4. 節足動物以外・幼虫以外, 5. セキツイ動物。昆虫カテゴリに出現した虫の名称の

数は47種類、幼虫等は6種類、節足動物(昆虫除く)は9種類、節足動物以外・幼虫以外は5種類、セキツイ動物は5種類だった。記述された名称の総数は811個だった。それぞれのカテゴリごとでは、昆虫カテゴリ638個(78.8%)、幼虫等は36個(4.4%)、節足動物(昆虫除く)は91個(11.2%)、節足動物以外・幼虫以外は28個(3.5%)、セキツイ動物は18個(2.2%)であった。

次に「5)あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表2に示す。調査対象者44人のうち42人から代表例として1つの名称が記述され、無回答は2人だった。昆虫は、9種類計35個(75.0%)、節足動物(昆虫除く)が2種類7個(15.9%)、幼虫等が1種類1個(2.3%)、セキツイ動物が1種類1個(2.3%)だった。1番多く記述されたのは「カブトムシ」であり、10個(10.0%)だった。

## 2 「動物」について

次に動物についての調査結果について述べていく。「2)「動物」を20書いてください」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表3に示す。この「動物」の集計方法として、「虫」と同様に、ネコ43の場合、44名中43名が記述していたことを表している。「虫」の場合と異なることは、動物の名称ごとの人数は、それらを代表する名称にまとめてカウントするというを行わず、各動物名称を記述していた人数をそのまま集計した。すなわち、類似した記述の場合や包含関係のある名称を述べていた場合も別々のものとしてカウントした。例えば哺乳類では、クマ31とあるが、これは「クマ」と記述したものだけをカウントしており、「シロクマ」や「エゾヒグマ」の記述があっても別々のものとしてカウントした。

今回の集計にあたり、記載された動物を以下

の5つのカテゴリに分類整理した。1. 哺乳類, 2. 鳥類, 3. 爬虫類, 4. 両生類, 5. 魚類。哺乳類カテゴリに出現した動物の名称の数は69種類だった。同様に鳥類は15種類、爬虫類は4種類、両生類は2種類、魚類は1種類だった。

記述された名称の総数は883個だった。それぞれのカテゴリごとでは、哺乳類カテゴリ809個(91.6%)、鳥類は49個(5.5%)、爬虫類は21個(2.4%)、両生類は3個(0.3%)、魚類は1個(0.1%)だった。

次に「6)あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表4に示す。調査対象者44人から代表例として1つの名称が記述され、総数は44個だった。哺乳類は、9種類の名称が記述され計43個(97.7%)、鳥類が1種類1個(2.3%)だった。1番多く記述されたのは「イヌ」であり、26個(59.1%)だった。

表1 「虫」の名称として記述されたものの出現数

カテゴリ	虫の名称	記述人数	
	カマキリ	42	
	カブトムシ	41	
	クワガタ	41	
	アリ	39	
	チョウ	37	
	バッタ	37	
	ハチ	31	
	セミ	30	
	トンボ	29	
	カ	28	
	テントウムシ	27	
	ハエ	25	
	ガ	20	
	カミキリムシ	20	
	カメムシ	19	
	コオロギ	19	
	ゴキブリ	18	
	スズムシ	17	
	カナブン	15	
	アメンボ	13	
昆虫 638	キリギリス	10	
	ホタル	8	
	アブラムシ	7	
	ゲンゴロウ	6	
	コガネムシ	6	
	アブ	4	
	シヨウリヨウバッタ	4	
	ゾウムシ	4	
	タガメ	4	
	トノサマバッタ	4	
	ハサミムシ	4	
	イナゴ	3	
	ウマオイ	3	
	クツワムシ	3	
	タマムシ	3	
	マツムシ	3	
	カゲロウ	2	
	ナナフシ	2	
	フンコロガシ	2	
	以下記述人数1のもの	8	
		ウスバカゲロウ, ゴミムシ, シラミ, センチコガネ, ノミ, ヒグラシ, ブユ, ミズカマキリ	

カテゴリ	虫の名称	記述人数
	ケムシ	14
	アオムシ	8
幼虫等 36	シャクトリムシ	7
	イモムシ	3
	ミノムシ	3
	アカムシ	1
	ダンゴムシ	35
	クモ	24
	ムカデ	17
節足動物 (昆虫除く) 91	ゲジゲジ	6
	ダニ	2
	ヤスデ	2
	ワラジムシ	2
	以下記述人数1のもの	3
	サソリ, ザリガニ, フナムシ	
	ミミズ	17
節足動物 以外・幼 虫以外 28	カタツムリ	7
	ゾウリムシ	2
	ナメタジ	1
	ヒル	1
	カエル	6
セキツイ 動物 18	トカゲ	4
	ヤモリ	3
	以下記述人数1のもの	5
		イモリ, オタマジャクシ, カナヘビ, ヘビ, ムツゴロウ

表2 「虫」の代表例 (n=44)

カテゴリ	記述語	記述人数
昆虫 35	カブトムシ	10
	テントウムシ	6
	アリ	5
	バッタ	5
	カマキリ	3
	カ	1
	セミ	1
	センチコガネ	1
	チョウ	1
節足動物 7	ダンゴムシ	6
	クモ	1
幼虫等	アオムシ	1
セキツイ動物	カエル	1
無記入		2

表3 「動物」の名称として記述されたものの出現数

カテゴリ	動物の名称	記述人数
	ネコ	43
	ウサギ	41
	イヌ	40
	ライオン	39
	ゾウ	38
	サル	37
	トラ	36
	キリン	34
	クマ	31
	パンダ	30
	ヒツジ	28
	ウマ	27
	ウシ	27
	カバ	24
	リス	21
	ネズミ	21
	ゴリラ	21
	コアラ	21
	タヌキ	20
	キツネ	18
	イノシシ	17
	ブタ	16
	ヤギ	12
	ヒョウ	12
	シマウマ	12
1. 哺乳類	チーター	11
809	シカ	11
	ハムスター	8
	カンガルー	8
	ラクダ	7
	チンパンジー	7
	ラッコ	6
	マントヒヒ	6
	アルバカ	6
	アライグマ	6
	シロクマ	5
	オラウータン	5
	ハリネズミ	4
	イタチ	4
	アザラシ	4
	レッサーパンダ	3
	ナマケモノ	3
	クジラ	3
	オオカミ	3
	モグラ	2
	ポニー	2
	サイ	2
	コウモリ	2
	カワウソ	2
	カピバラ	2
	イルカ	2
	アシカ	2

カテゴリ	動物の名称	記述人数
	以下記述人数1のもの	17
哺乳類 (つづき)	ウォンバット, エゾヒグマ, シヤチ, シロナガスクジラ, スカンク, タスマ ニアデビル, テナガザル, トド, トナカイ, ヌー, バイソン, ビューマ, ブチハイエナ, ボブキャット, モル モット, ロバ, ワラビー	
	ペンギン	11
	ニワトリ	8
	トリ	5
	アヒル	4
	ダチョウ	4
2. 鳥類	フラミンゴ	4
49	インコ	2
	スズメ	2
	ハクチョウ	2
	ヒヨコ	2
	以下記述人数1のもの	5
	エミュー, オウム, ガチョウ, カラ ス, ハト	
	ワニ	9
3. 爬虫類	ヘビ	7
21	カメ	4
	トカゲ	1
4. 両生類	カエル	2
3	イモリ	1
5. 魚類	メダカ	1

表4 「動物」の代表例 (n=44)

カテゴリ	記述語	記述人数
	イヌ	26
	ゾウ	7
	ネコ	3
哺乳類	キリン	2
43	ウサギ	1
	クマ	1
	パンダ	1
	ヒツジ	1
	ライオン	1
鳥類	インコ	1

### 3 「虫」「動物」についての好き嫌いについて

「3) 虫は好きですか、嫌いですか」および「4) 動物は好きですか、嫌いですか」についての結果を表5および図1に示す。好きと回答した数値を1、嫌いと回答した数値を5としている。したがって、数値の大きいほうが嫌いということになっている。虫の好き嫌いの平均値は3.23であり、標準偏差は1.20だった。動物の好き嫌いの平均値は2.07であり、標準偏差は1.05だった。虫の好き嫌いとは動物の好き嫌いでは、「好き」、「どちらかといえば好き」と回答した数は虫では、15人（41.7%）だったが、動物では32人（82.1%）との違いが見受けられた。同様に「嫌い」、「どちらかといえば嫌い」と回答した数は虫では21人（58.3%）だったが、動物では7人（17.9%）との違いが見受けられた。

表5 虫と動物の好き嫌いの割合集計 (n=44)

	虫好嫌	動物好嫌
1 好き	3	16
2 どちらかといえば好き	12	16
3 どちらでもない	8	5
4 どちらかといえば嫌い	14	7
5 嫌い	7	0
平均	3.23	2.07
標準偏差	1.20	1.05

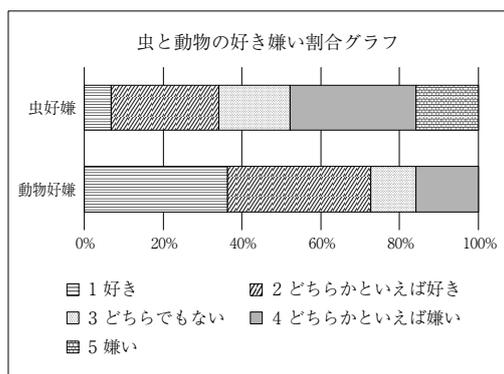


図1 虫と動物の好き嫌いの割合グラフ (n=44)

### 4 虫や動物に関連した取り組みについて

次に、現在の職場で、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みを行っているかどうかについて述べていく。「7) 自身の担当の教室で動物を飼っていますか」の結果を図2に示す。「8) 自身の授業や外遊びなどで子どもたちとともに虫取りなどを行うことについて」の結果を図3に示す。

担当教室での動物飼育の実施 (n=44)

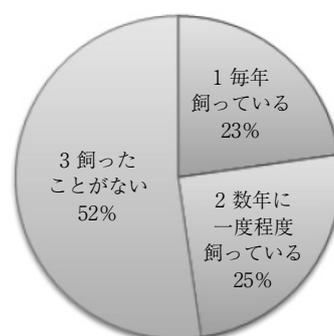


図2 現在の職場で動物を飼っているかどうかについての実態調査 (n=44)

外遊びでの虫取り実施 (n=44)

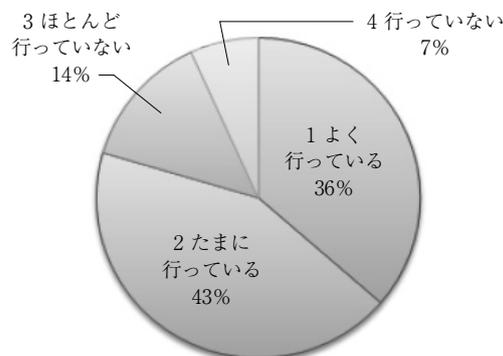


図3 現在の職場で授業や外遊びなどで子どもたちとともに虫取りなどを行っているかについての実態調査 (n=44)

図2より、現在の担当教室において動物を毎年または数年に一度飼っていると回答した保育士は47.7%であった。飼ったことがないとの回答した保育士は52.3%だった。理由に記入の

あった内容を見てみると、動物を飼う活動をしている理由としては「毎年地域の方が幼虫をくださるから」「園庭で子どもが見つめて飼っている」「近くの小川などに子供と一緒に取りに行っている」といった入手しやすさ等(3人)や「メダカやカブトムシは飼育しやすい」といった飼育のしやすさ(1人)があげられていた。飼ったことがない理由としては「0,1歳児のクラスでは飼わない」(4人)という発達段階の問題、「アレルギーの問題」(2人)という健康面の問題、「休みの日に世話ができない」(2人)という勤務の問題があげられていた。その他に「子どもたちが小さいのでメダカ、ザリガニなどしか飼っていない」(1人)、「動物の飼育は前例がない」(1人)といった内容もあげられていた。

図3より、現在の職場で授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行っているかどうかについては、79.5%が行っている傾向であり、よく行っているとの回答は36.4%であった。虫嫌いが58.3%であったにもかかわらず、虫取りなどを行っているという回答が多かった。虫取りを行っている理由としては、「子どもたちが虫をよく発見して捕まえているから」といった子どもが興味を持っているから(8人)、「自然に興味をもてるきっかけになる」、「家庭で体験している子どもが少なく、触れる機会の確保

のため」といった子どもの経験のため(3人)、「季節の植物や虫を観察させている」といった季節感(3人)があげられていた。虫取りを行っていない理由として、「0,1歳児クラス」といった発達段階をあげていた(2人)。

### 5 現在、虫を触ることについて

「7) 虫を今現在、触(さわ)ることについての意識について」の結果を図4に示す。1.平気で触ることができる、2.何とか触ることができる」と回答したのは31名(70.5%)だった。4.極力触りたくない、5.絶対に触わりたくない」と回答したのは9名(20.5%)だった。

## IV 考察

### 1 「虫」としてイメージする範囲について

虫についてのイメージは表1および表2より、昆虫を主とした日ごろ身の回りに存在し、目にしている小動物がそのほとんどを占めているが、ゾウリムシからムツゴロウ、イモリやヘビまでと広範囲に及ぶことが明らかとなった。また、虫の代表例として記述されたものも昆虫を主とする小動物であったが、カエルの記述もあり、小動物として捉えている範囲の違いが明らかとなった。

「虫」として一番多くの記述がなされたのがカマキリ(42人)、2番目以降はカブトムシ

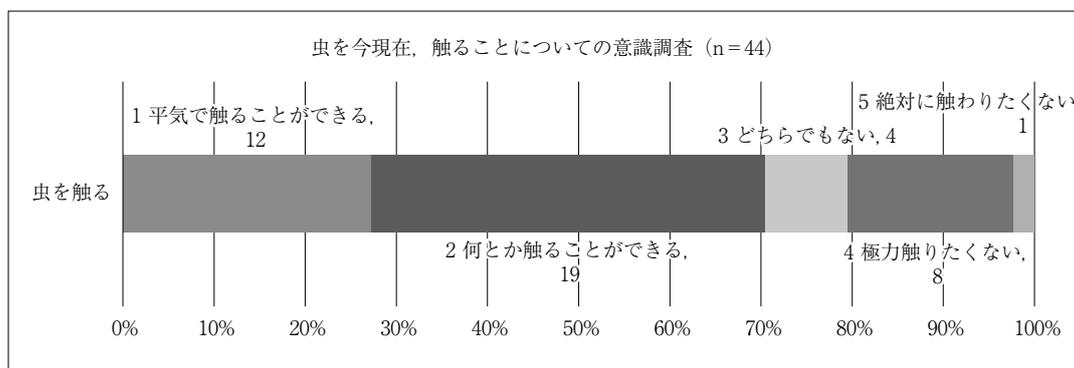


図4 虫を今現在、触(さわ)ることについての意識調査 (n=44)

(41人), クワガタ(41人), アリ(39人), チョウ, バッタ(37人)であった。これらは、日ごろ目にする小動物であり昆虫である。昆虫以外では7番目にダンゴムシ(35人), 14番目にクモ(24人), 20番目にムカデ, ミミズ(17人), 24番目にケムシ(14人)と続く。ケムシやアオムシは昆虫の幼虫である。しかし、回答者には1つの虫として認識されていると考えられる。幼稚園教諭・保育士志望学生の調査(平田・小川, 2017)ではヨウチュウと回答した者が4名いたが、保育士の調査ではヨウチュウとの回答はなされていなかった。最小の生き物ではゾウリムシが1人に記述されている。脊椎動物では、カエル(6人), トカゲ(4人), ヤモリ(3人)が複数回答となっており、イモリ, オタマジャクシ, カナヘビ, ヘビ, ムツゴロウといった、魚類から両生類, 爬虫類であるこれらを虫と認識していることが判明した。

以上より「虫」という用語は日常用語として用いられており、人によってその範囲には多少の違いがあることがデータとして明らかとなった。その範囲のほとんどが小動物であるがゾウリムシやカエル, トカゲ, ヤモリといったものまで含む場合もあることが明らかとなった。これらの結果についてはおおむね、平田・小川(2017)の結果と整合していると言える。

## 2 「動物」としてイメージする範囲について

動物についてのイメージは、表3「動物」の名称として記述されたものの出現数および表4より、哺乳類を主とした日ごろ身の回りに存在し、ペットや動物園, 映像等で目にしてものがそのほとんどを占めている。ペンギンをはじめとする鳥類, ワニなどの爬虫類, カエルなどの両生類, メダカといった魚類も記述されているが、無脊椎動物は記述されておらず、動物の範囲として認識されているのは、脊椎動物であることが明らかとなった。

「動物」として一番多くの記述がなされたのはネコ(43人)であり、2番目以降はウサギ(41人), イヌ(40人), ライオン(39人), ズウ(38人)と続きペットや動物園等でよく目にして動物であると考えられる。

動物の代表例(表4)の記述で一番多かったのは、イヌ(26人)であり、ネコ(3人)を代表例に挙げる人数は圧倒的に少ない。ペット以外で記述された動物名は主に動物園にいるものである。

日常用語との関連では、鳥類の中に、トリと記述したのが5名おり、トリを動物名称と認識していることが明らかとなった。また、ニワトリとヒヨコの記述も見られ、ヒヨコをニワトリの子どもとしてではなく、動物名称と認識していることが明らかとなった。なお、ニワトリと記述した8名中1名がヒヨコを記述していた。

以上より、「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも、日常用語として用いられている動物という認識が現職の保育士の中においても強固であることが明らかとなった。これらのことは、幼児教育を担っている人材が動物=哺乳類という認識を持っていることであり、偏った動物概念や認識を無意識に園児たちに植え付けている要因となっている可能性が示唆される。

## 3 「虫」「動物」についての意識

虫の好き嫌いと動物の好き嫌いについては(表6)、どちらも好きな傾向を回答した人数が13であり、どちらも嫌いな傾向を回答した人数は2人と少ない。虫の好き嫌いとはほぼ逆の傾向を示しており、動物好きが圧倒的に多く(72.7%), 虫嫌いがやや多い(虫嫌い傾向47.7%, 虫好き傾向34.1%)現状がうかがえる。しかしながら、平田・小川(2017)の学生の状況と比較すると、動物の好き嫌いに有意な差は見受けられなかったが(両側検定:

p = 0.2089 n.s.), 虫の好き嫌いに有意な差があることが分かった (両側検定: p = 0.0051\*\*). これは, 学生時には虫の好き嫌いがあったものの, 現職保育士として働いていくうえで, 虫に関する嫌悪感が薄らいでいくことが示唆されていると捉えることができる。

動物好きが多い中, 動物飼育の実態については (表7), 必ずしも動物好きだからといって動物飼育を行っているとは限らない (好き傾向 32人中, 飼っているまたは数年に一度飼っていると回答したのは13人, 飼ったことがない

と回答したのは19人) ことが推察される。また, 平田・小川 (2017) の学生の状況と比較すると, 就職後の動物飼育の実施意識と現職保育士の動物飼育の実態について有意な差が見られた (両側検定: p = 0.0368\*)。これは, 学生時に動物飼育を実施していこうとする意識を持っていたとしても, 現場での受け持つ子どもの年齢や勤務状況により, 動物飼育を実施したことがないという現状となっていることが推察される。

虫の好き嫌いとは現在の職場で授業や外遊びな

表6 虫の好き嫌いとは動物の好き嫌いのクロス集計 (n = 44)

		動物好き嫌い				
		1. 好き	2. どちらかといえば好き	3. どちらでもない	4. どちらかといえば嫌い	5. 嫌い
虫好き嫌い	1. 好き	1	1	0	1	0
	2. どちらかといえば好き	7	4	1	0	0
	3. どちらでもない	3	1	0	4	0
	4. どちらかといえば嫌い	3	6	4	1	0
	5. 嫌い	2	4	0	1	0

表7 動物の好き嫌いとは現在の職場で動物を飼っているかどうかとのクロス集計 (n = 44)

		現在の職場で動物を飼っているかどうか		
		1. 毎年飼っている	2. 数年に一度程度飼っている	3. 飼ったことがない
動物好き嫌い	1. 好き	4	1	11
	2. どちらかといえば好き	4	4	8
	3. どちらでもない	0	4	1
	4. どちらかといえば嫌い	2	2	3
	5. 嫌い	0	0	0

表8 虫の好き嫌いとは現在の職場で授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行っているかどうかとのクロス集計 (n = 44)

		子どもたちともに虫取りなどを行っているか			
		1. よく行っている	2. たまに行っている	3. ほとんど行っていない	4. 行っていない
虫好き嫌い	1. 好き	2	1	0	0
	2. どちらかといえば好き	8	4	0	0
	3. どちらでもない	1	5	1	1
	4. どちらかといえば嫌い	4	6	3	1
	5. 嫌い	1	3	2	1

どで子どもたちともに虫取りなどを行っているか(表8)から、現在虫が嫌い傾向にあっても、虫取りを行っている実態があることが明らかとなった。これは、平田・小川(2017)での学生の意識と一致した内容となっている。

虫の好き嫌いとは虫を触ることの意識について(表9)において、虫を触りたくない傾向のほとんど(9人中7人)が虫嫌い傾向であることがわかる。しかし、虫を触ることの意識と現在の職場で授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行っているかでは(表10)、虫を触りたくない傾向の約過半数(9人中5人)は、虫取りを行っている実態が明らかとなった。平田・小川(2017)での学生と現職保育士での顕著な違いとして、虫に触ることの意識の違いがあげられる。割合として、触ることができる傾向(選択肢1, 2)では、学生:保育士=25.0%:70.5%, 触りたくない傾向(選択肢4, 5)では、学生:保育士=64.3%:20.5%とほぼ逆

の傾向を示している。これは、表7の考察と同様に、学生時には虫に触ることに苦手意識のあったものの、現職保育士として働いていくうえで、虫を触ることに関する苦手意識が薄らいでいくことが示唆されていると捉えることができる。

以上より、現職保育士において、動物については好きな傾向を示すものが72.7%と多く、虫については嫌いな傾向を示すものがやや多く(虫嫌い傾向47.7%, 虫好き傾向34.1%), 虫が嫌い傾向であっても、虫を触ることが苦手傾向であっても、子どもたちとともに虫取りなどの活動を行っている実態が明らかとなった。これらの現状から、保育士として就職後、動物を飼育してみたり、虫取りを子どもたちと行ってみたりといった体験活動によって、学生時代の虫に関する嫌悪感や苦手意識が薄らいでいる可能性であることが示唆される。

表9 虫の好き嫌いとは虫を触ることの意識とのクロス集計 (n=44)

		虫を今現在、触ることについての意識				
		1. 平気で触ることができる	2. 何とか触ることができる	3. どちらでもない	4. 極力触りたくない	5. 絶対に触わりたくない
虫好き嫌い	1. 好き	3	0	0	0	0
	2. どちらかといえば好き	8	4	0	0	0
	3. どちらでもない	1	5	0	2	0
	4. どちらかといえば嫌い	0	8	3	3	0
	5. 嫌い	0	2	1	3	1

表10 虫を触ることの意識と現在の職場で授業や外遊びなどで子どもたちともに虫取りなどを行っているかのクロス集計 (n=44)

		子どもたちともに虫取りなどを行っているか			
		1. よく行っている	2. たまに行っている	3. ほとんど行っていない	4. 行っていない
虫を触ること	1. 平気で触ることができる	7	4	1	0
	2. 何とか触ることができる	6	9	3	1
	3. どちらでもない	2	2	0	0
	4. 極力触りたくない	1	3	2	2
	5. 絶対に触わりたくない	0	1	0	0

## V まとめと今後の課題

本研究では、以下の2点を目的としてきた。1点目は、現職保育士を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、保育士が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることである。2点目は、保育士が実施している、子どもたちとともに虫や動物に関連した取り組みの実態を調査し、虫の好き嫌いや動物の好き嫌いでの比較検討および、幼稚園教諭・保育士志望学生の持つ就職後に子どもたちに提供しようとする動物関連の活動意欲との比較検討を行うことである。

今回の調査研究により、虫のイメージは、83.1%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物(11.2%)や節足動物以外(3.5%)、まれに脊椎動物の一部(2.2%)が含まれることが明らかとなった。また、「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。その動物のイメージは、哺乳類が91.6%であり、続く鳥類が5.5%、爬虫類は2.4%であることが明らかとなった。

保育士が実施している虫や動物に関連した取り組みの実態では、現在虫が嫌い傾向にあっても虫取りを行っている実態があること、虫を触りたくない傾向の約半数は虫取りを行っている実態が明らかとなった。これと、幼稚園教諭・保育士志望学生と現職保育士とを比較した結果、保育士として就職した後は、就職前に抱いていた子どもたちとともに虫や動物と関連した取り組みを行っていくという活動意欲をもとに(平田・小川, 2017)、動物を飼育してみたり、虫取りを子どもたちと行ってみたりといった体験活動によって、学生時代に保持していた虫に関する嫌悪感や苦手意識が薄らいでいる可能性が示唆される。

今回は、現職の保育士を対象とした調査を

行った。今までに、幼稚園教諭・保育士志望学生を対象とした調査(平田・小川2017)、現職の小学校教員を対象とした調査(平田・小川, 印刷中)を行ってきた。今後は、中学校・高等学校理科の教員志望学生や現職理科教員が「虫」や「動物」についてどのような意識を持っているのかを明らかにする調査を行い、それぞれの調査結果を比較検討していくことを課題とした。

## VI 謝辞

質問紙調査に協力いただいた保育士の皆さま、データ入力を補助してくれた佛敎大学教育学部 片井ふく実氏、安友みのり氏に謝意を表します。

## 引用文献

- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか? - 虫嫌いに関する親子の関連性 -」日本科学教育学会研究会研究報告 19 (2), 57-62, 2004
- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか? - 子どもの虫嫌いに与える親の影響 -」日本理科教育学会九州支部研究紀要 (33), M1-M7, 2005
- 平田豊誠, 小川博士「幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査」佛敎大学教育学部学会紀要, 16, 63-74, 2017
- 平田豊誠, 小川博士「小学校教員の「虫」と「動物」についての意識調査」佛敎大学教育学部論集, 印刷中
- 木村紗帆, 野崎健太郎「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識 - 虫嫌いの仕組み -」椋山女学園大学教育学部紀要 9, 109-119, 2016
- 厚生労働省「保育所保育指針解説書」2008
- 栗原泰子, 野尻裕子「保育者養成学生の動物との関わりについて - 動物への対応と幼児への援助について -」川村学園女子大学研究紀要 19 (2), 27-38, 2008
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説理科編」2008
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」2008

- 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省「幼保連携型認定  
こども園 教育・保育要領解説」2014
- 中村陽一, 渡邊ユカリ, 遠藤翠「幼稚園における飼  
育の実態に関する研究」日本保育学会大会発表論  
文集(55), 440-441, 2002
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子-その実態と原因  
の考察(1)-」日本保育学会大会研究論文集  
(49), 64-65, 1996
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子-その実態と原因  
の考察(2)-」日本保育学会大会研究論文集  
(50), 692-693, 1997
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子-その実態と原因  
の考察(3)-」日本保育学会大会研究論文集  
(51), 302-303, 1998
- 田中悠樹「教員志望学生の虫に対する嫌悪感情につ  
いて-虫嫌いの自然体験活動に対する意識への影  
響-」日本理科教育学会全国大会要項(65), 163,  
2015
- 山下久美, 首藤敏元「幼稚園・保育園の動物飼育状  
況と飼育体験効果に関する研究展望-子どものム  
シとの関わりに関する研究に注目して-」埼玉大  
学教育学部附属教育実践総合センター紀要(4),  
177-188, 2005

